

## 福井県英研は半世紀にわたり全国の 英語教育をリードしてきた

福井工業大学名誉教授  
県英研シルバー会顧問  
岩崎達雄

私は現在白寿で、五月で百歳を迎える超高齢者だが、いつの間にか本県英語教育界の草分け的存在になってしまった。この度、私の尊敬する福井県英語研究会長の田中宏明氏から会報に拙文を求められたので、英研の創立者の一人として英研が還暦を迎えた（田中会長の言葉）歴史の一端と、未来への展望について措辞を述べることにした次第である。

まずは本県の英語教育が文部省の全国学力調査の結果三年連続して日本一の座についてお祝いを申し上げたいと思う。その最大の理由は長期にわたり本県の優れた英語研究会の皆さんが真摯かつ真剣に生徒たちの指導に取り組んで来られた成果であることは疑いない。勿論、国や県及び県教委の手厚い指導や援助のお蔭もあり、福井大学はじめ全国の各大学から専門の先生方の指導助言をいただいたこともありがたかった。しかし、今にして思えば見出しのテーマを事実として認めざるを得ないと私は確信している。

始めに少しばかり私の教員歴を申し上げよう。私は神戸大学経済学部の出身であり、本来ならば経済界で働くべき立ち場の人間だが、先の大戦に敗れたわが国は、当時、満足に食べ物がないほどの貧乏国になってしまい、鯖江市に住んでいた私は年老いた両親を抱かえて都会へ出て民間企業に就職するなど思いもよらなかった。大学卒業後暫らく福井軍政部で通訳の仕事に就いたが、軍政部の解散で無職となってしまった。昭和23年（1948年）のことである。さて、困ったなと思案に暮れていたとき、当時の鯖江高校長前田幸久氏から英語教員として招かれ、渡りに舟とばかりに教員の道を歩むことになったのである。

実は、学生時代私にとって英語は好きな教科でもあり、通訳の経験もあったので、喜んで教員としてスタートしたのであった。

私にとって英語教育は大変楽しく若者に毎日接することは、限りない喜びでもあった。時には元軍政部のアメリカ人が学校を訪問してくれて、生徒たちはびっくり仰天して、私たちを眺めたこともあった。

しかし、教職に就いて間もなく私は当時の英語教育について疑問を抱くようになった。中学では高校の、高校では大学の入試対策が指導の中心で、専ら英語の読み書きに重点が置かれ、聞き話す面は付け足しの感じであった。私なりに多少の工夫は試みたが、個人的な範囲にとどまっていたに過ぎなかった。同校で数年間の英語教員を務めていた時、幸運にもフルブライト留学のチャンスが訪れた。自費で留学することなど思いもよらなかったが、公費で留学できるのだから、全国から希望者が殺到したのだが、運よくテストにパスすることが出来て、米国留学の機会が与えられた。期間は半年間であったが、帰国後の昭和33年（1958年）に県教委の指導主事のポストに就くことになった。私が、全県の英語教育に関わるようになった。

たのは、その時からである。米国留学で得た感覚では、やはり生きた英語は聞き話す面が重要で、わが国の教育は偏っていると強く感じた。

その折、指導主事に就任した二年目に、文部省（当時）主管の全国学力テストが行われ、初めて英語テストにヒアリングが導入された。全国の英語教員に取ってはショックだったであろうが、わたしとしては、「これあるかな」という前向きな感じを持った。それから1年間全県的な予備テストを数回実施し、意を決して本県の高校入試にヒアリングを導入した。まだ、全校放送の設備も半数の高校にしかなく、初年度は英語の先生が各教室を音読して回ったため、隣の教室に聞こえてしまい不公平だとの声上がり、翌年には全高校に放送設備が完備したのはありがたかった。県英研の放送テストの命名はその時以来のもので、今日も用いられていることは感慨深い。その後、文部省の勧めもあり、他の都道府県の高校入試にもヒアリングテストが実施されたが、最後の県が取り入れたのはなんと30年も後だと聞いている。

以来、先生方もご存知のように放送テスト以外にも、県英研では弁論大会やセミナーなど多くの行事が実施され、本県の英語教育の推進が多面的で精力的に実施されて来て、生徒の学力向上に大きく貢献したことは申し上げるまでもないであろう。特に、中学と高校が一体となった県英研は全国に例がなく、文科省の学力調査の成績でも、中高そろって上位を占めている自治体は福井県以外には皆無である。やがて小学校にも英語の専任教員が配置されるであろうが、その時は小・中・高一環の英研が大きな力を発揮するであろう。

さて、長々と本県英語教育について過去のいきさつについて説明して来たが、決して日本一は近年始まったことではなく、長い歴史があり、今回の発展に至ったことを、ご理解いただきたいと願ってのことである。ただ、会員の皆さんとしては過去の事情を知るよりは現在から未来の本県英語教育への関心が高いと推察されるので、その点について私の考えを申し上げます。

ここで私は田中宏明会長の名言「現状維持は退歩なり」を強調したいのである。福井県の英語教育が日本一になったのだから、そのやり方を今後も続けていけばよいと、もし皆さんが安易に考えるなら、やがて他の自治体の努力と進歩によって、本県は取り残されて落伍県となってしまおう。また、文科省や県教委の施策にただついて行けば良いと考えるのも、トップ集団を続けるには充分とは言えないと思う。むしろ、本県が国の施策の先取りをするくらいの気概と実行力を示すべきだと思うのだ。「そんなことできるはずがない」とか「思い上がりもいい加減にしろ」と批判する言葉も聞こえそうである。では私の反論を申し上げます。私は本県の英語教育が国の施策の後追いだけでなく、逆に先取りしている面があることを実例で指摘したいと思う。これも最近の田中会長の挙げられた例だが、大学入試の英語の配点がリーディングテスト100点とリスニングテスト100点の合計200点に改められたが、田中会長の言われるように本県の受験生にとっては有利な改革だと私も同感である。なぜか。

県英研の二大事業である研究部と放送テスト部が、これまで実施して来た内容がこの度の大学入試テストにそっくり当てはまるからである。研究部のリーディングでは、中学から高校まで、多くの語数を用いた長文の理解に重点が置かれているのが、その第一理由だ。また一方、放送テストの内容は長年にわたる創意工夫に富んだ、筋金入りのもので、全国から模範とされている。センター試験でリスニング100点となったことは、福井県の受験生にとっても幸いである。つまりこの度大学入試テストの英語問題は県英研が先取りしてきたと言ってもよいであろう。

先取りならばまだある。高校のディベート指導だ。近年、本県の代表校が全国大会のトップクラスに位置を占めていることはご承知の通りであり、県英研では全県的な予備テストの大会も開かれ競い合っている。わが国の教育が小・中・高校ともに従来の暗記主体の教育から問題解決などの自分で考える教育へと、大きく転換してきたことはご承知の通りだが、ディベートは単に多くの言葉や文法の知識を持つだけでは相手に対抗できず、時に相手に反論し、時に自説を巧みに主張するなど、臨機応変の対応が必要である。私はやがてこのディベート指導が何らかの形で国の施策に取り入れられる日が来るであろうと予想している。

今後の教育に欠かせないのが、菅総理大臣の提唱するデジタル化であろう。すでに文科省では全国の小・中・高の全教員にデジタル指導力育成を実施することが報じられており、本県でもその点は積極的で、指導者の招聘や機器の利用に前向きだと聞いている。

最後に先生方に申し上げたいことは、これからの教育者は大学で受けた教養で一生過ごしていった過去の時代と異なり、新しい理論や技術を身につけなければ教職を続けられない時代が到来したと考えるべきであろう。勿論、その変革は教育界だけではない。むしろ政治、経済、科学技術の世界ではもっともっと急速で激烈であろう。しかしながら、一面で自己改革は苦しいが楽しい要素を持つことを挙げておきたい。わが国の英語教育のトップ集団である先生方が、その楽しさと生きがいを、是非、味わっていただきたいと願っている。私としては福井県英語教育界の応援に、微力ながら命のある限り務めるつもりなので、よろしくお願ひしたいと存じます。

